

たのしいことは
元気の素

もう
起きないと
しごと
まにあひ
ないよ

おはよ

今日、しんどい

休まのー!!
じゃあ
夕方の
「よる・あ-ち」も
お休みなねー

「よる・あ-ち」
行きます!

しごと
も
いきます

ガッパッ

しごと
いってきまーす
あ-ちに早く帰るのー

いって
らっしゃー!!

「よる・あ-ち」
元気の基ね。

やってみよう、
やってみたよ

一緒に学べる生涯学習
障がいがあってもなくても

いつでもいつからでも
だれでも学べる社会に



目次

① 「学びは生きる喜び」～生涯学習による社会の変革を～	 P1
神戸大学附属特別支援学校 副校長	佐藤 知子
公的な支え手	 P2
② 「自分らしさ」が活きる	
三田市社会福祉協議会 地域福祉課副課長	畑 清美
③ 全ての人にウェルビーイングな公民館に	
兵庫県公民館連合会会長	萬浪 佳隆
④ 学びへの意欲の高さに驚きと感動	
公益財団法人こうべ市民福祉振興協会	高田 雅光
⑤ 場と仲間 広がる豊かな人生	多田 千景
大学での学び「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」	 P4
⑥ 「KUPI」でひろがる仲間と学び～大人になっても学びの場は大切です	
神戸大学国際人間科学部准教授	川地 亜矢子
⑦ 4年間の KUPI を通して	
KUPI 学生	小川 七海
保護者立ち上げの活動	 P5
⑧ 線引きしない「場」づくり	
NPO 法人にしのみや次世代育成支援協会	泉 明子
⑨ チャンゴが導いてくれたもの	
東はりまチャンゴサークル代表	近野 悦子
支援者による活動	 P6
⑩ 知的障がい者サッカーを通した余暇の充実にむけた取り組み	
但馬知的障がい者サッカー連盟代表	守山 洋輔
⑪ 劇場はウェルカム 新しい世界への扉を開こう	
NPO 法人DANCE BOX 事務局長	文
⑫ ありのままに、共に、在る喜び	
Bacchetta majica らくがきクラブ主宰	能勢 伸子
⑬ メンバーさんが教えてくれた大切なこと	
おやこあさんぶるピノキオ 代表	義積 美由紀
⑭ 筆はおしゃべり～障がい者と楽しむ書道	
心葉書道会(アトリエ KOKOROHA)主宰	加奈森 由理
⑮ 音楽の楽しさを伝えたい 人の可能性は無限大	
にしはまピアノ教室(音楽教室)主宰	西濱 優衣香
支援者としてかかわる	 P9
⑯ 人生に立ち会う	
神戸大学大学院生	江村 聡史
⑰ 支援者と共に考えるガイドヘルパーという仕事	
特定非営利活動法人 代表	平井 亜也
保護者の思い	 P10
⑱ 我が娘と歩んだ24年	浜崎 節子
⑲ 第三の選択肢を求めて～福祉事業型「専攻科」	 P11
エコール神戸挑戦と今	
株式会社WAP コーポレーション代表取締役	岡本 正



障がい者生涯学習リスト

⑲

①「学びは生きる喜び」 ～生涯学習による社会の変革を～

神戸大学附属特別支援学校
副校長 佐藤 知子

神戸大学教育学部卒業
高等学校、小学校の音楽専科の教師を経て、
1988年より神戸大学附属特別支援学校に
勤務。
音楽の授業を担当する。
音楽教育の会所属



私が勤める神戸大学附属特別支援学校は、小中高全校生 60 名、教員 32 名のこじんまりした温かい雰囲気の知的障害児対象の学校です。知的障害の子どもたちの公教育の歴史はまだ浅く、その開始には、就学猶予制度に対して「どんなに障害が重くとも学校で学ぶ権利を保障せよ!」と多くの人が声を上げることが必要でした。兵庫県では 1960 年代から徐々に養護学校が設立されてきました。本校の設立は 1969 年。兵庫県で 3 番目にできた学校です。創立当初の資料には、「こどもの基本的人権を守る」「子どもが主人公の学校をつくる」という文言が沢山あります。そのような校風のもとで、「学びとは何か、学びで大切なことは何か」を常に学校全体で考えてきました。

私は音楽の教師です。音楽を学ぶということにはどんな意味があるのでしょうか。私は、音楽は子どもたちの感情や願いに深く繋がるものだと考えています。そして、真剣に作曲された曲には、人が生きていくことに対する様々なメッセージが込められています。今の自分の気持ちを代弁してくれるような曲、人間らしく生きることを励ますような曲に感動的に出会った時、目の前が大きく開けていくような気持ちや自分の中にこんな感情があるのだという驚き、大きな喜びが湧き上がってきます。そうやって音楽と自分とを結びつけていく力が育まれていくのです。まずは心を揺さぶるような曲との出会いがあること、そして、その人らしい表現が受け入れられる、尊重される授業の場であることが、音楽の授業の条件です。じっと耳を傾けたり、リズムを取ったり、歌ったり、時にはふっと別のことに気を取られてまた音楽に戻ってきたり…、その人らしい表現と気持ちの昂揚がその場にいる人たちと響き合い、喜びの輪がどんどん広がっていくことが、音楽の醍醐味だと思います。好きでもない歌を歌うことを強制されたり、ましてや大きな声を出すように発破を掛けられたりする中では、音楽は音楽として存在できません。それと同様に強制では人は学べないし、育たないのです。

私は障害者の生涯学習に関わるようになって、「卒業後も学びたい、もっと生き生きと暮らしたい、そして新しい自分になっていきたい」という願いがどの人にもあることを強く感じました。そして、卒業後に学びの場では、学ぶこと＝喜びであることも。私自身、卒業生が 10 年、20 年経っても、学校で歌った歌を口ずさんでいることを聞くと、卒業後も音楽を学び続けられる場があればと思います。生涯学習の取り組みが進むことは、学校、ひいては教育の概念を変革することにつながっていくでしょう。学ぶことが喜びになるような教育が必要なのだと、全ての教育者が考えるような学校になってほしいと心から願っています。

今本校では、卒業後の学びプロジェクト「ポランの広場」を立ち上げ、近隣の福祉施設の方に学校が蓄積してきた文化を共有する取り組みを進めています。事業所にニーズをお聞きし、夏はプール、秋、冬は体育館で、レクリエーション活動を実施しました。教員達がまず動きの渦を作りだして活動の楽しさをストレートに参加者に伝えることができるのが、学校の良いところです。教員のパワーに圧倒されながらも、徐々に活動に加わり始める参加者の笑顔に、どの年齢になっても生き生きと暮らしたいという願いを感じています。やがては神戸大学の学生にも参加してもらい、インクルーシブな共同体を作っていく一つの拠点になることが私たちの夢です。

「学習権とは、読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し、創造する権利であり、自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利であり、あらゆる教育の手だてを得る権利であり、個人的・集団的力量を発達させる権利である。」ユネスコ学習権宣言(1985)

全ての人が生涯にわたって学ぶ喜びが追求できる社会を一緒に創っていきましょう。

公的な支え手 「社会福祉協議会」

②「自分らしさ」 が活きる

畑 清美

社会福祉法人三田市社会福祉協議会
地域福祉課副課長

社会福祉協議会は多様な人の「参画」と一人ひとりの力が「活きる」地域づくりを進めています。

▼障害のある方・学校・ボランティア活動者、それぞれの力を合わせて、一つのカタチにしていくな事業「ともいき三田」で、雪だるま作品を作りました。



三田市社会福祉協議会（以下、社協）では、障害のある人の「自分らしい暮らし」「共生社会」の実現に向けた生涯学習は、地域の中で「支え手」「受け手」を超えた「地域で暮らす人」としての顔の見える関係づくり、いわば「ご近所さん」としての相互理解に発展し深めていけるか・・・と考え、多様な出会いと誰もが学び合える機会づくりを応援しています。

そのための一環として、地域住民と障害のある方の交流から相互理解につなげる福祉学習の提供を始め、当事者同士が出会い・語れ・認め合える場（ぴあサロン）、得意なことをボランティア活動で地域や社会に還元する機会（ぴあぴあチャレンジ）、そして色々な人と一緒に場を作り上げるなど協働による目標達成の価値を感じる機会（ともいき三田・ボランティアまつり参加）などを設けています。

これら事業を通じた“多様な体験の機会”は、地域社会で「生きがいをもって、自分らしく生きる」を実現するためのほんのわずかなきっかけです。そして、当事者や支援者が当事者自身の得意・不得意や他者との関わりにおける課題を知り、得意が活かされる方法を検討したり、コミュニケーションのノウハウを得たりするなど、それぞれの課題に気づき、向き合う機会でもあります。

社協では当事者の方の声から事業を生み、その事業を通じて得た経験を「日常の暮らし」の中でも展開していけるようサポートをおこなっています。例えば、子ども食堂でボランティア活動や身近な地域の園芸活動の参加などにつなげるなど、それぞれの得意なことを活かすことで、身近な地域の中で「生きがい」と「つながり」を感じながら継続的に活動されています。

地域の中で、色々な人と出会い、知り合い（交流し）、学び合い（高め合う）続けること、その中でさらなる経験を積み重ね、つながりを深めていくような生涯学習の機会には、障害の有無に関係なく、暮らしを豊かにするうえで大切です。

ぼんやりとでも「何かしたい」と思った時、ぜひ近くの社会福祉協議会に気軽に相談してみてください。

公的な支え手 「公民館」

③全ての人の ウェルビーイングな 公民館に

萬浪 佳隆

兵庫県公民館連合会会長

公民館は地域の活動発展推進していく拠点の役割を担っています。公民館連合会では、県内の公民館活動の充実を図るとともに生涯学習社会の発展とその振興に資するため、関係部局及び地域団体、学校組織等とのネットワーク構築等に向けた先進事例等の情報収集及び共有に努めています。



兵庫県生きがい創造協会事務局

兵庫県公民館連合会では「ひようご障害者の生涯学習」連携コンソーシアムの趣旨に賛同し、社会的包摂に寄与するため、障害者の生涯学習を推進するモデル公民館等を公募し、その取り組みを支援することとしている。

その中で、当連合会独自の「障害者の生涯学習を推進するモデル公民館等補助事業」を令和3年度に事業化した。この補助メニューは令和3・4年度の期間限定の事業として、モデル公民館1館に年度ごとに10万円を限度に補助するものであるが、残念ながら新型コロナウイルス感染拡大の影響もあって応募が無い状況である。

また、本年度の第11期中央教育審議会生涯学習分科会において、「全ての人のウェルビーイングの実現に向けて、共に学び、支えあう生涯学習・社会教育」について議論されている。その3つ目に今後の生涯学習・社会教育の振興方策の5番目、「多様な障害に対応した生涯学習の推進」の中に「障害者の生涯学習推進を担う人材育成・確保や、共生社会についての理解の促進」とある。

このことから、今後公民館等社会教育施設においてウェルビーイングの実現に向けた事業展開が活発化するとと思われる。当連合会も傘下の公民館等社会教育施設を支援していくために全力を尽くしていきたいと考えている。

公民館で障害者向けの事業と言えば「青い鳥学級」「くすのき学級」を開催している市町もある。それ以外でも手話講座や点字講座などが開設されているが、今後は障害者の生涯学習推進を担う人材育成に軸足を置いた事業展開が必要と思われる。当連合会としてもそのような人材育成に積極的に取り組んでいきたい。全ての人のウェルビーイングのために！

④ 学びへの 意欲の高さに 驚きと感動

高田 雅光

(公財) こうべ市民福祉振興協会しあ
わせの村ユニバーサルコーディネーター

活動紹介

「KOBÉ しあわせの村 ユニバーサルカレッジ」

学校卒業後の障がい者を対象とした生涯学習事業として、令和3年7月に開講。歴史・生物・文化など、その道の専門家による講義や体験学習など多様なテーマから興味関心の幅を広げる。そして会場となるしあわせの村の豊富な施設を活かした部活動や、自ら学びを深めそれを発表する研究発表会も実施。



KOBÉ しあわせの村ユニバーサルカレッジは今年で2年目に入りました。年に9回、特別講義を含めて12講座を実施します。1年生と2年生併せて40名の受講生が、月1回のペースですがしあわせの村の施設を利用して教養講座や体験学習、部活動を楽しんでいます。

私は中学校、特別支援学校で、長年特別支援教育に携わってきました。このユニバーサルカレッジの構想を知ったとき、「わあ、すごいことをやるんだ。」と正直驚きました。私は教育の現場にいたときは、障がいがある生徒の自立を促すこと、進路をどうするかなど眼前のことしか考えられていなかったことに気づかされました。卒業後の豊かな生活のため、彼らの学びの場は必要だと思いつつも、どこかよそ事と感じていたように思います。

学校現場では細かな情報や資料を得て、計画を立てて教育活動が進められますが、ユニバーサルカレッジでは情報が少ない、受講生の障がいの程度はどうか、講座の内容に興味を示すのか、講師やボランティアの方がどのように受講生に接したらいいのかなど、心配事は多々ありました。何度も関係者と打合せを行い、準備を進めてきました。

しかし、始まってみるとその心配の多くは吹っ飛びました。講師の先生方の分かりやすい工夫もありましたが、講座の内容は決して簡単なものではないにもかかわらず、眼を生き活きとさせ受講する姿、質問タイムでは司会者が困るほど積極的に質問している姿に感動しました。彼らの学びに対する意欲がここまで高いとは、想像以上でした。

講座が進むにつれ、初めは緊張していた受講生たちも友達ができ、休み時間や行き帰りに楽しそうに一緒にいる姿を見て、このカレッジをやって良かったなと嬉しく感じています。また、このカレッジに関わっていただいている講師の先生方やボランティアスタッフも皆さんも彼らに接して、感動や学びがあったとお聞きします。受講生も関わったスタッフも共に充実感を味わえたことに感謝します。そして、今後はこの活動を多くの方に知っていただき、活動の輪を拡げて行きたいと思っています。

KOBÉ しあわせの村ユニバーサルカレッジ参加者保護者から

⑤ 場と仲間、 拡がる豊かな人生

多田 千景

筆者紹介

26歳ダウン症の息子を持っています。色んなことに楽しそうに取り組む、色んな経験のなかで知識を増やしていく息子の様子が嬉しくて、送迎も楽しく感じています。同時にたくさんの人にこのような機会を知って欲しい、参加して欲しいと願っています。また、親の送迎がなくても参加できる場所にこのような場があることも願っています。



小学6年生のある日、新聞を見て「かあさん、これは仁徳天皇陵と言って世界で一番大きなお墓やで」と言ったのです。私はこの子が歴史を習ってもどうせわからないだろうと思っていたので学校の授業には関心を持っていませんでした。しかし、授業で聞きかじったことで新聞に興味を持っていました。知的障害があっても学ぶことで人生が豊かになると感じた瞬間でした。しかしながら、学校を卒業すると「授業」のように何かを教えてくれる場がありません。カルチャーセンターでも知的障害者を対象としたものではなく、親が講座やお稽古に連れていくことはできますが、先生と生徒の関係、そしてそこには必ず親が介在しています。また駿介は普段、健常な人ばかりのなかで仕事をしています。彼なりの「仕事場」という意識、そして親もつい、「がんばってね。ちゃんとお仕事しなさいね」と声をかけてしまうので、日常は常に「がんばらなければ!」という緊張のなかにあるのだと思います。

ユニバーサルカレッジでは、同じような年齢の同じような障害を持つ仲間がいて、障害を理解してサポートしてくださる方々がいる場所なのでとても安心できるようです。どんどん手を挙げて質問し、それがトンチンカンな発言であったとしても受け止めてもらえて伸び伸びと学べる場になっているのだと感じています。座学から体験まで多彩なプログラムがあり、日常ではできないことを経験させていただいています。すべての内容を理解しているとは思えませんが「学ぶこと」そのものに喜びがあることが伝わってきます。どのプログラムも知的障害者だからと幼稚な内容ではないことが印象的です。講師陣も各分野の専門家や親(健常な大人)が聞いても楽しいと思える講座内容です。運営される方々の知的障害を持つ彼らに対するレスpektが感じられます。

共に学ぶ仲間がいて、場がある。このような取り組みが神戸だけでなく、身近で親が送迎しなくても自分で行ける場所にあって欲しい、ユニバーサルカレッジに参加してその思いはますます強くなっています。

先生の立場から

⑥「KUPI」で ひろがる仲間と学び ～大人になっても 学びの場は大事です

川地 亜弥子

神戸大学
国際人間科学部準教授

活動紹介

神戸大学・学ぶ楽しみ 発見プログラム (KUPI)

神戸大学で行う知的障害青年のための学びの場。10月から2月、火、水、金の17時～20時、10～19名の知的障害を持つ青年が、大学生と共に講義を受けたり、サポートを得ながら自分たちの学びを深めている。今年で4年目。



神戸大学学ぶ楽しみ発見プログラム (通称 KUPI クピ) で授業を担当して、今年で4年目になります。KUPI は、夕方以降の学ぶ場で、昼間に働いている人も参加できます。働く場所があるんだったら、学ぶ場はなくてもいいのでは、と思う人もいるかもしれませんが、私はここでの経験を通じて「大人になっても学ぶ場があることは大事だ」「働きながら学べることは大事だ」と感じています。10～2月の週に3回、16:30 頃に集まって(仕事で遅れても大丈夫です)、お弁当を食べたりおしゃべりしたりして、講義や活動が始まります。夜8時が終わりの時間ですが、名残惜しいようで、残って話している人が結構います。

KUPI の正規の授業や活動の前後に盛り上がり、課外活動(お出かけ)の企画がまともたりもします。サポートで入っている神戸大学生(メンターと呼んでいます)も一緒になって考え、でかけます。ともに学ぶ仲間と夢が広がって、新しい活動の主人公になれます。これも学びの場があることで生まれる楽しさの一つです。

私の授業では、毎年、書きたいことを書きたいだけ書く作文に取り組んでもらっています。書いた後、みんなで読むことも大事にしています。書きたいけどみんなには読まれたくない、という人もいますので、無理に全体で読むことはしません。先生だけに読んでほしい、〇〇さんに読んでほしい、という思いを尊重します。もちろん、書きたくない、書かない、という自由もあります。それでも多くの人が集中して書いて、みんなの前で読みます。自分の大好きなもの、家族のこと、彼のこと、旅行のこと、KUPI の仲間のこと、イラスト… 作品にはその人の思いがあふれています。1年目はなかなか書けない人もいましたが、2年目以降はぐっと集中して書く人がほとんどでした。今年は後輩への思いを書いた人もいました。書かされる作文から、書きたいことを思いっきり書く作文へ。来年度も、どんな KUPI 学生さんに出会えるか、どんな作品が生まれるか、楽しみです。

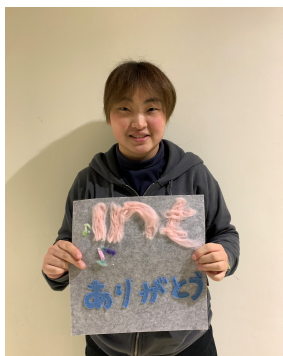
KUPI 学生の立場から

⑦ 4 年間の KUPI を通して (KUPI: 神戸大学・学ぶ楽しみ 発見プログラム)

小川 七海

筆者紹介

神戸大学附属図書館勤務
阪神タイガースとオリックスバファローズが大好き。
「WILL (神戸大学)」の活動を頑張っています。



KUPI に4年間通って一番よかったことは、中・高生のときより友達が増えたというのは自分の中で一番よかったなと感じています。また、授業の内容も難しいと思うものは、ほとんどありません。どの先生方の授業にも笑い等があり、題にある通りの「学ぶ・楽しみ発見」ということを、皆、受けていくにつれて感じたり、理解したりしました。しかし、誰とも話ができていない人を見つけると話ができるようになるといいなと思います。

自分が一番印象に残っていて、またやりたいと思うのは、ポッチャです。皆とチーム戦で戦い、あのゲームで友だちになったという人もいます。私は、赤木先生と同じ誕生日というところから盛り上がり、授業でも、楽しく分かりやすいものになってます。

私は、神戸大学附属図書館で、主に清掃の仕事をしています。大学内の場所も分かるようになり、外部から来られた方、新一年生等に質問された際、受け答えをし、案内をしています。水曜日の授業で詩を書こう!というテーマで、参加者、皆が書いてみると、作文の川地先生に「すごい!!」とほめられたのは、今でもすごくうれしい時間をすごしたな～としみじみと思っています。何より、自分がここまでやってこれたのは、先生方、黒崎さん、メンター学生さん、一般学生さんのおかげだと、強く思っています。

最初は、前に立ってマイクも持てなかったけれど、今は堂々と前に立って言葉を発しています。自分からも KUPI 関係者の皆様にお礼がしたいです。4年間、本当にありがとうございました。

今年で最後となる KUPI を目一杯、楽しみたいし、今後 WILL の活動にも積極的に参加していきたいと思っています。今まで WILL の活動に参加出来ていなかったのも、これからもお願いします。の意味も込めて、気合いを入れて最後まで KUPI を頑張ります。

WILL: 多くの人や団体とともに、「持続可能な開発のための教育 (ESD; Education for Sustainable Development)」を推進していくユース主体の組織。事務局を神戸大学に置く

保護者立ち上げの活動 (コミュニティ)

⑧線引きをしない 「場」づくり

泉 明子

特定非営利活動法人にしのみや次世代
育成支援協会 (NO BARS) 代表

活動紹介

「NPO法人にしのみや次世代 育成支援協会 (NO BARS)」

野外活動やお菓子、料理教室などの「体験活動」と、駄菓子をつールとした「居場所づくり」をしている。
障がいの有無にかかわらず子どもから大人まで参加でき、お互いを知り合う機会となっている。



特定非営利活動法人にしのみや次世代育成支援協会、略称は NO BARS (のうばーず)。NO BARS (のうばーず) には線引きをしない、という意味が込められています。

娘が在籍していた特別支援学級の子どもの体験活動の場づくりから始まりましたが、障害の有無に係わらず共に活動する中でお互いを知り合う場が必要だと考えるようになりました。野外活動やお菓子・料理教室などが、その「場」です。また、地域活動に関わる中で、地域の様々な境遇の人が障害の有無や世代に係わらず、知り合い、顔が見える関係ができる場づくりが必要だと考えるようになりました。駄菓子などをツールとした地域の居場所、お茶の間「ぶちだがりやさん」と「のうばーず食堂」がその「場」です。

前者は、それぞれが興味のあることに夢中になれる時間があります。活動のすべてではなくても、その一部分、例えば野外活動では薪割りや火おこしに。料理教室では食材を切ることやいい匂いを嗅ぐこと、パン生地をこねることに。夢中になって心が満たされる時間がある…その時間が大切だと思っています。長年関わる中で、以前は苦手だったことが平気になっていたり、困った時に助けを求められるようになっていたり、やり抜く体力がついていたり、その成長に気付く場面があります。継続することや積み重ねることの大切さをしみじみ感じるものです。

後者は、地域住民が立ち寄るきっかけとなるツールとして駄菓子があり、ぶちイベントやワークショップなども開催し、食堂も運営しています。駄菓子を買ったり、ぶちコンサートを鑑賞したり、ワークショップに参加したり、食堂でごはんを食べたり…自然に場を共有しています。共有する時間を積み重ねることで、別の場で出会った時にも「こんにちは」と挨拶を交わせる関係になること、それこそが地域共生社会の第一歩だと考えています。

保護者立ち上げの活動 (民族音楽)

⑨チャンゴが 導いてくれたもの

近野 悦子

東はりまチャンゴサークル代表

活動紹介

「東はりまチャンゴサークル」

障害者と親、きょうだいで活動。
隊列になり、みんなで息を合わせ演奏。
運動量もあり、ストレス解消にも。しんどい時や気が乗らない時はその人のペースで参加。
演奏する楽しさや観客からの拍手で達成感を感じている。
月2回、公民館を借りて活動。
メンバーは知的障害の方、聴覚障害の方とその家族。



私の子どもは男女の双子で、現在19歳。2人とも重度の知的障害者です。2歳のころに自閉症と診断され、担当医から余暇の大切さを教えてもらい、子どもたちの余暇探しが始まりました。ピアノ、体操、水泳、英会話など、障がい児でも受け入れてもらえるところには通ってみましたが、楽譜が読めなかったり、指導が理解できなかったり、なかなか楽しめるまでいきませんでした。ある時、太鼓のイベントに誘われチャンゴの演奏を見た二人はジャンプしながら拍手喝采。今までにない目の輝きを見て、これは何か違う!と思い、すぐにチャンゴサークルに入れてもらいました。

チャンゴは隊列を組んで演奏するのですが、やりたい!という気持ちから、最後まで演奏する忍耐力、音や動きをメンバーと合わせる協調性、が自然と身につきました。楽しくて社会で生きていく力も学べるチャンゴをもっと他の人にも知ってほしい、体験してほしいと考え、東はりまチャンゴサークルを立ち上げました。メンバーは知的障害、聴覚障害、軽度から重度、年齢も小学生から29歳まで、様々。ですが障害児だけでなく家族も一緒に楽器を練習している中でお互いの障がいの理解が進み、子どもたち同士の助け合いも自然にできるようになりました。コロナ禍でも練習を続けて演目を増やし、地域のお祭りや講演会などに出演しています。

サークルを設立して3年がたち、活動を継続していくには、活動拠点、支えてくれる人材、楽器購入などの資金、が必要だと感じていました、そこでチャンゴが朝鮮半島の農民が発展してきた音楽『農楽』ということに基づいて、現在、農業をはじめ農業を軸とした福祉事業所を作り、チャンゴも生活もできる場所ができないか模索しています。

余暇を探す中でチャンゴと出会い、チャンゴを通して仲間ができ、地域ともつながりました。そのつながりを大切に、これからも歩んでいきたいと思っています。

支援者による活動 (スポーツ)

⑩ 知的障がい者 サッカーを通した 余暇の充実にむけた 取り組み

守山 洋輔

但馬知的障がい者サッカー連盟代表

活動紹介

「但馬知的障がい者
サッカー連盟」

「多くの人にサッカーの楽しさを伝えたい」と、但馬知的障がい者サッカー連盟を立ち上げる。

活動拠点

・豊岡市出石町
・香美町香住区
・朝来市和田山町



兵庫県は全国的に見ても知的障がい者サッカーが盛んです。県内の特別支援学校には数多くのサッカー部が存在し、知的障がい者サッカー日本代表選手を輩出するまでになりました。一方で卒業生がサッカーを続けてできる環境がまだまだ整っていない現状にあります。特に但馬地域においては知的障がい者有する当事者を主体としたスポーツクラブはこれまで存在せず、当事者にとって「スポーツをする」という選択肢がありませんでした。そこで余暇活動の充実を図ること、心身のリフレッシュを図り健康的な身体を作ること、また友達との輪を広げたり、サッカーの楽しさを共有することを目的として但馬知的障がい者サッカー連盟を設立しました。但馬地域内に3つの活動拠点を設け、どの地域に住んでいても参加しやすい環境を整えることでこれまで汲み取れなかった潜在ニーズを獲得することが出来ました。半数以上がこれまでスポーツクラブ等に所属したことがない未経験者でしたが、学校や福祉サービス事業所、就労先等では出会えない方々とスポーツを通してコミュニケーションを図れるということは素晴らしいと感じています。今では60名以上が在籍し、年齢層や運動・身体能力も様々で活動時にはエンジョイコースとアスリートコースにグループを分けて活動することでそれぞれのレベルやニーズに合わせて活動しています。広報においてはSNSで情報を発信したり、直接特別支援学校に赴いて学校や保護者へ活動についてお知らせする機会をいただきながらより認知度を高めるための活動も行っています。これから多くの当事者が当団体の活動を通して人生がより豊かになるように取り組んでいきたいと思っています。

支援者による活動 (ダンス)

⑪ 劇場はウェルカム！ 新しい世界への 扉をひらこう

文

NPO 法人
DANCE BOX 事務局長

活動紹介

「DANCE BOX」

神戸新長田を拠点にコンテンポラリーダンスを通じて、優れた作品を紹介、新しいアーティストの育成、劇場が地域社会に果たす役割を考慮しつつ、積極的にアプローチしている。
障がいのあるなしに関わらず、共に楽しめるワークショップなども開催



ダンスボックスでは、様々な障がいのある人々（プロフェッショナルなアーティストから今日初めて踊る人まで）と長年ダンスの活動を行ってきました。

芸術や表現活動は、障がいや国籍、年齢をこえて、誰もがいつからでもできることです。特に、コンテンポラリーダンスは「これが正解」ということはなく、その人の身体で、感覚をフルに働かせて踊ることがその人のダンスであり、表現になっていきます。なかでも、月1回の「やさしいコンテンポラリーダンスクラス」の対象は、踊りたい人はどなたでも。1歳児から70歳をこえる方まで、障害者手帳のある人もない人も単発の人もリピーターの人もそれぞれのペースで参加しています。

「手を上げてストップ!」という指示で止まった形（ポーズ）は十人十色。回を重ねると、新しい形がどんどん生まれ、それぞれの工夫も見えてきます。

表現することだけでなく、他者の表現を見ることが大切な時間で、自然に互いをリスペクトし合うやわらかな時間が生まれます。

公立・民間を問わず、劇場はこの数年、大きく意識が変革し、障がいのある人を対象にしたワークショップや鑑賞事業が増加しました。まだ少しずつですが、視覚や聴覚に障害がある人への情報保障も進んでいます。

そこで、皆様をお願いします！

是非、障がいがある人も、遠慮なく劇場や様々なイベントに足をお運び下さい。

「当劇場は障害者大歓迎」「障害者対象」とわざわざ書いていなくても、興味を持ってきてくださったら、「この方ならどのプログラムが楽しめそうか」、「どのように参加すればオモシロイか」など、どの施設のスタッフも相談に乗ってくれるはず！そのやり取りも、互いに新しい発見があるでしょう。

人と人との小さな出会いが、少しずつ社会を変えていく。劇場がそんな社会や世界につながる扉になるとよいなあと思っています

支援者による活動 (アート)

⑫ ありのままに、 共に、在る喜び

能勢 伸子

Bacchetta majica らくがきクラブ 主宰

活動紹介

「bacchetta majica らくがきクラブ」

“どんな障がいのある方も
絵画やアートを通して自己表現を。”

「bacchetta majica らくがきクラブ
では、絵画やアートを通して、それぞれ
が楽しく表現することをサポートします。
絵の具、ちぎり絵、紙粘土、工作、色鉛筆
など素材はいろいろ。
個々の「表現したい!」を大切にしていま
す。

数年間、一言も喋らなくなった青年と出会ったことがある。出会って最初の頃は、二人で、ただひたすら粘土で、小さな丸い形を作る日々。ある日、大きなチューブの絵の具、クレヨン、紙を持参。すると、クレヨンで描いた線の上から、絵の具を大きく伸ばす作業が始まった。深い青の中に、チラチラ煌めく色が見え隠れする画面。あまりに熱心に力を入れて何時間も描いているので、思わず、大丈夫?と声をかけた私に、「だいじょうぶよ。」数年ぶりに出た言葉。今も、彼は絵を描き、発表もしている。会話も口数が多いほうではないが、普通に会話している。

色んな出会いがあった。ただ単に平面に描くだけではなく。

様々な素材に触れ、感じたままに構成する。

ありのままのその時々気持ちに任せて表現する。

その心地よい感情を共有する喜び。生きている一瞬の美しいと感じる出来事。

自分らしくあること。自分らしくいられることの心地よさ。

私は絵描きを志し、制作しながら、障がい
があると言われる人達と出会った。もう、その
人達との垣根は無い。作り手として、表現
する仲間として、日々を生きている幸せを
感じている。

時々、自分に「だいじょうぶよ。」と
声かけながら。



支援者による活動 (音楽)

⑬ メンバーさんが 教えてくれた 大切なこと

義積 美由紀

おやこあんさんぶるピノキオ 代表

活動紹介

「おやこあんさんぶるピノキオ」

障がいを持つ人とその家族で、器楽奏、手話劇、ダンスなどの活動。福祉関係での発表・交流をしているが、発表のための活動ではなく、活動そのものを楽しむことを大切にしている。



私たち、おやこあんさんぶるピノキオが活動の中で、最も大切にしているのは、グループの中で、ひとり、ひとりが、思いをそのまま自由に表現することです。現在、1才～34才のメンバーさんと、その家族、スタッフで活動をしています。毎回、楽器遊びや、ダンスの中で、とびきりのアイデアを見せてくれるメンバーさんに、私たち、大人は、胸をときめかせています。感じたことをありのままに表現し、その姿を見て、メンバーさんたちが真似ていく。表現の集合体が自然に生まれる、その瞬間は本当に感動的です。

活動中のメンバーさんの過ごし方は、様々です。毎回、みんなが楽しめることを考えてきてくれる人、積極的に参加している人、遊具で遊んでいる人。自由意思を大切にしたいという思いから遊具で遊んでいるメンバーさんを無理やり活動に誘導することはしません。月日が経ち、遊具で遊んでいたメンバーさんがいつの間にか、活動のリーダーになっています。幼いメンバーさんを優しくあやしているお兄ちゃん。楽器の準備や片づけを積極的に手伝ってくれるメンバーさん。その経緯は、とても自然で、お互いの関りは、とても微笑ましいです。1か月に1回の活動ですが継続の力を感じます。

24年前、「子どもたちとの音楽活動をそのまま、周りの方々に届けることが出来たら、どんなに楽しいだろう」と立ち上げた「おやこあんさんぶるピノキオ」。沢山のメンバーさんとの出会いがあり、メンバーさんから、思いをそのまま表現することの素晴らしさ、楽しさや、共に奏でる、踊ることの喜びを教えてもらいました。どうぞ、私たちに会いに来てください。共に自由を表現しましょう。私たちの活動が、生涯学習に関心を持ってもらえる、きっかけになれば、とても嬉しいです。

支援者による活動 (書道)

⑭筆はおしゃべり ～障がい者と楽しむ書道

加奈森 由理

心葉書道会
(アトリエ KOKOROHA) 主宰

活動紹介

「心葉書道会
(アトリエ KOKOROHA)」

障がいの有無にかかわらず、書を通じて自分を生き生きと表現する、本人の創作意欲の開放を楽しむ場を提供。基本個別指導だが、グループワークも相談に応じます。



「うちの娘に書く場所を与えてやっていただけませんか」

5年前、息子の友人のお母様よりこのようにお声掛けをいただいたのが、障がい者の方々の書道活動のきっかけとなりました。障がいについて知識もなくお受けすべきか戸惑いましたが、私自身、息子の不登校の経験から「人と繋がる」「居場所を探す」ということは案外難しく、有難いことであつたことを思い出し、とりあえずスタートしました。現在、小学生～20代のダウン症、発達障害の方が不定期ですが月1～4回活動をしています。

さて、コミュニケーションが困難な場面もあるなか私に何ができるのか。折角来てくださっているのだから何か成果をお見せしなければと、文献を探したり、講習に行ったりしました。が、手を変え品を変え準備をしても空振りに終わることも多く、落胆したり悩んだり(笑)。気付いたことは、障がいは百人十色、このスイッチを押せばこうなるという答えはない。私の力みは彼女たちにとって「障害」となることもあるということでした。

それより彼女たちの筆からこぼれ落ちる言葉や心象風景のなんと面白いことか。我々書家が「美」と考える価値など軽々飛び越えた書き様に、素直に感動しともに笑う時間が大切なのではないかと。

ダウン症の女性が作品を書き溜めた段階で、時期尚早ながらホテルのギャラリーコーナーにて展覧会を開きました。彼女達に自分の作品を見ていただいている感覚はあったかどうかはわかりませんが、懐かしい先生、友人らが集い、とても温かい空間となりました。書家の先生方も新鮮な感動を持ち帰られたようでした。

退行に向かう彼女たちに足を止めさせたくなくてコロナ期も万全の態勢で活動を継続してきました。書くのは完全拒否(笑)の時もありますが、それでも胸に詰まった栓がポンと外れ水が流れ出すように書いた日はスッキリした表情で帰っていきます。障がいの有無を問わず皆が「自分らしく」「自分を楽しませる」場所をこれからも提供できればと思っています。

支援者による活動 (音楽)

音楽の楽しさを伝えたい

⑮人の可能性は 無限大

西濱 優衣香

にしはまピアノ教室(音楽教室)主宰

活動紹介

「にしはまピアノ教室」

レッスン内容は多数用意。一人一人の特性、希望に応じたレッスンをしている。レッスンがうまく進まない時は「講師の教え方の工夫が足りない」という視点でレッスンに臨む。ピアノ指導、歌唱指導、リズム打ち等音楽指導全般を行う。



私のピアノ教室では講師の私自身に発達障がいがあることが縁で「障がいのある方、不登校、引きこもり等困り感のある方」を積極的に受け入れている。

しかし私は困り感のある方に向き合う時「障がいのある〇〇さん」「不登校の△△さん」という見方をしない。目の前の生徒さんをよく観察して「このアプローチは分かりにくいかな?違う方法で伝えてみよう」「とても楽しそうだから次回も取り入れてみよう」等、一人一人の様子を何より重視している。私の生徒さんへの接し方は、障がいがあるなしで何ら変わることはないが、困り感に応じて、さまざまな工夫はする。絵カード、シール、指番号指輪、鍵盤把握のためのお団子・さくらんぼグッズ(画像参照)等々。これは音楽的に少しでも向上してもらうためであるが、私が何より大切にしている事は「楽しい」と感じてもらうこと。音楽という字は「音を楽しむ」と書く。工夫グッズを遊びのように使う中で、気が付いたら音楽(ピアノ)も学べている。これが私の理想だし現在実践している事である。楽しいと好きになれる、好きだと伸びていける。最近では緊張と特性で指を独立させ弾くことが難しかった子が、優しい音色が出せるようになってきた。

ここで少し話は変わるが、私はいい意味で「社会の当たり前」を疑いたいし無くしたいと考えている。例えば「挨拶はして当たり前」と言うもの。私は小さい頃から声を出すことが苦手だった。体がカチンコチンになり挨拶が上手く出来ないと、多くの先生から責められた。

私のピアノ教室では「まずは挨拶から」と言わない。声を出せなかったり動けなくても温かく見守る。なぜなら「心には溢れんばかりの思いがあり(心では)いっぱいお話しをしていること」を誰もない私が一番知っているから。

人の可能性は無限大だ。どの人にも諦めず接し続けたい。将来、西濱先生に出会ったから音楽が大好きになったと思って頂けたら、これが何よりの喜びだ。

支援者としてかかわる (大学生)

⑩ 人生に立ち会う

江村 聡史

神戸大学大学院生
よるあーちのボランティア

活動紹介

「よるあーち」

神戸大学大学院のサテライト施設「のびやかスペースあーち」で、毎週金曜日17時から行われている集まり。

子ども食堂、学習支援、居場所づくりのプログラムが行われている。

集まってくるメンバーは障がいのある方とご家族が主。地域や学生ボランティアが活動を支える。



私は臨床心理学を専攻している修士課程2回生の大学院生です。

よる・あーちには学部1回生の冬から参加させて頂いていますから、これまで5年間この活動に関わらせて頂いています。活動に参加し始めたきっかけは、私自身幼いころに知的障害を持つ友人が身近にいたこともあり、障害のある方達と関わることが純粋に楽しいと感じられたことでした。そんな些細なきっかけではありましたが、活動が続ける中で数多くの学びと思い出を得られていると感じています。

私に関わってきた活動には、私と近い世代、あるいは同い年の人達が多く参加しています。彼らにとって私の先輩達は「お兄さん・お姉さん」だったわけですが、私は「友達」として接してもらうことが多いように思います。ボランティアとして、週に1回会う中で世間話なんかをしてみると、仕事のこと、家庭のこと、将来のこと、などなど、等身大な彼らを窺い知ることができる話をたくさんしました。私たちが成人を迎えてからは、どんなお酒が好きか、タバコは程々に、なんて話もします。共に年を経る中で、生まれ持ったものは様々あれど、私も彼らも等しく人生を歩んでいることを実感します。私が専門的な知識を身に着けるにつれて、彼らの持つ特性や配慮すべき点、見えている世界への理解や想像は進んでいます。等身大な彼らを知ること、大学で専門的な知識を身に着けることと同じくらい大切な事だと思います。

私が卒業して以後は、彼らが「お兄さん・お姉さん」になります。すでにボランティア活動で積極的に企画運営に携わろうとしていたり、小さい子相手に遊んであげる場面が見られたり、「人の上に立ってみることを、教えること」という大切な学びを得ようとしています。年を経て、立場変わって、その時々学びがあるのだと思います。そこに立ち会っていただけることに、我々の学びもあるのではないのでしょうか。



支援者としてかかわる (ガイドヘルパー)

⑪ 支援者と共に考える

ガイドヘルパー という仕事

平井 亜也

特定非営利活動法人 TOPO 代表

活動紹介

「TOPO」

知的障害や自閉症、発達障害などのハンディがある人と、支援介助する人が共に支え合いながら時間を共有できる場を提供。

競泳、スポーツ、アウトドアなど余暇活動をサポート、学習イベントを企画運営。



知的障がい者ガイドヘルパーの支援はまずは相手を知ることから始まります。外出の際だけではなく、今本人や家族が困っていることは何か、余暇はどんなふうに通っているのか、本人の性格や特性、興味の対象など。まず相手をそのまま受け入れた上で、ご家族や本人と一緒に支援方法を探っていきます。大切な余暇時間を預かり、マンツーマンで外出するガイドヘルパーは簡単な仕事ではありません。言葉のコミュニケーションが苦手な人が何を感じているのか、今どうしたいのかを瞬時に察知して動かないと危険にさらされることもあります。パニックにさせてしまい車道へ飛び出していくのを力づくで押さえつけたこともあります。通りすがりの人からの視線や心ない言葉を浴びせられることもあります。それでも回を重ねて本人の気持ちがわかっていくようになるとトラブルも減り、その人本来の性格が見えてきます。お互いに向き合い、相手のことを知ろうとすることで、関係性が生まれてきます。

TOPO の活動に参加しているメンバーの中には自力で通勤や外出ができる軽度自閉症の人や、自立するために敢えて1人で通勤している中度自閉症の人がいます。言葉は話せても自分の思いを正確に伝えることができない人がほとんどです。自閉症の特性の一つである独り言や、自分の思いのまま行動してしまうことで、不審人物と思われ通報されることがあります。そんな場面で直接本人に注意を促してくれたらそれも立派な支援だと思います。見た目ではわからない自閉症の特性を知っている人が一人でも増えれば、安心して外出できるようになるでしょう。

いろんな立場の支援者を増やすことが知的障がい者の生活の質を上げていくことにつながると信じて、これからもヘルパー養成と余暇支援活動を続けていきます。個性的なメンバーと一緒に過ごす時間の面白さを体感したい人、ぜひ支援者になってみてください。

⑩ 我が娘と歩んだ 24 年

浜崎 節子

筆者紹介

娘の晴加はダウン症として生まれる。学生時代から晴加の「やりたい」を大事にいろんなことに挑戦させてきた。学校を卒業した後、晴加にあう仕事がなく、自宅を改装して「犬カフェ」を開き、晴加の働く場を作る。また、ダンス、よるあーち、KUPI、ユニバーサルカレッジ、あんだんてKOBEなど晴加の好奇心に応え、活動の範囲を拡げていくサポートをしている。



親が子の進路を考える時は、大きく分けるとまず幼児期の受け入れ先、次に学校の選択、最後に社会に出てから、になります。大人になるまでの成長過程もとても大事ですが、人生で一番長く過ごすのは学校を卒業してから。私と晴加はそれを常に意識して暮らしてきました。

幼少期から友達が大好きな晴加は、音楽やダンスをしているグループに参加させてもらいました。数経ち、「この子は私が思っている以上に活動範囲の広い子なのでは？」と思うようになりました。「体力がないから無理なのでは？」という私の推測が晴加の活動範囲を狭めていたと気づき、それからは本人のしたいことは何でもさせました。彼女の行動力は凄く、親の心配は取越し苦労で、毎日楽しく過ごすことができました。晴加は私にはない綺麗な心や良い面を沢山持っています。それに触れた時、「私は何てちっぽけな人間なんだ！」と気付かせてくれる、そんな晴加を尊敬します。それと、どこにいても自分の一番楽しいことを見つけ出す天才です。

「私が晴加の手を引いてきたのは、ここまで。これからはこの子の後ろをついていこう！ 人格のある一人の大人として見守っていこう」と高校生ぐらいから思うようになりました。

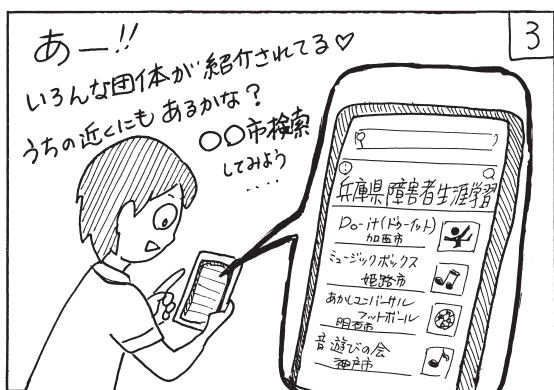
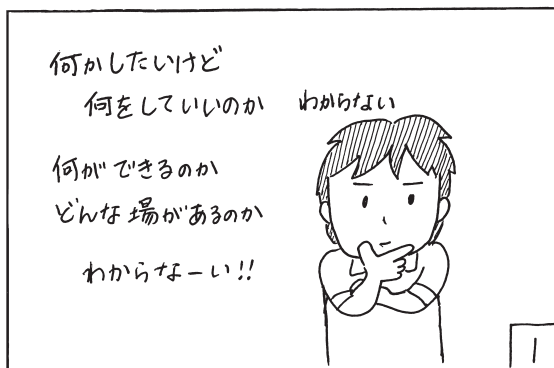
晴加は日常生活で困難なことにぶつかった時、周りからの手助けを待つだけでした。私はそれが気になり、自分で解決していく力が必要と思い、晴加が考えた解決方法が失敗だとわかっていてもさせてみました。失敗をしてこそ、より良い方法がわかったようです。

社会人になってからも余暇活動の受け入れ先が多いのに驚いています。生涯楽しく自分らしく生きていくために余暇にも力を入れています。

多くの皆様からの支援があってこそ、今の充実した生活があります。心より感謝いたします。

学びの場の探し方は？

スマホで検索！兵庫県障害者生涯学習リストの紹介



神戸大学大学院人間発達環境学研究科

津田英二

E-mail : zda@kobe-u.ac.jp

⑬ 第三の選択肢を求めて

～福祉事業型「専攻科」

エコール KOBE の挑戦と今

株式会社 WAP コーポレーション
代表取締役 岡本 正

昭和22年神戸市生まれ。

兵庫県立特別支援学校教員を退職後、
2008年7月に株式会社 WAP コーポレー
ションを立ち上げ代表取締役となる。

2011年4月に新長田の再開発ビルに
自立支援法に基づく障害者自立訓練事業
使った障害者の学びの場「福祉事業型
『専攻科』エコーKOBÉ」を設立。



エコール KOBE が誕生して12年目を迎えました。この12年間に障害者の学びを取り巻く環境に大きな変化、いや劇的ともいえる変化が起きたことに私自身も驚きを隠せません。

エコール KOBE は、和歌山県での自立訓練事業を使った「学びの作業所」をお手本に神戸・新長田地区の震災復興ビルの地下街に誕生しました。和歌山の「学びの作業所」（「シャイン」や「フォレスクール」等）は障害をもつわが子の為に卒業後も学びの機会が必要と考えた多くの親や教員の強い願いが結実したものでした。しかし、当時は自立訓練事業で障害者の学びの場を作るという発想自体がなかったため、行政からの強い圧力も実際にあったと聞きます。

私は、学園の名前を付ける際に、自立訓練事業を使った専攻科ということわざ「専攻科」を付けて福祉事業型「専攻科」エコール KOBE と名乗りました。その理由は、本来は文科省が支援学校高等部3年の後に、あてしななき専攻科を作っていないために、仕方なく自立訓練事業で専攻科を作ったのだという意思を示すためのものでした。

20年も前になりますが、支援学校の教員であった私にとっても、「就職か福祉的就労か」という二者択一の進路指導が「当たり前」のことでした（こうした状況は基本的に今も変わっていないのですが）。この中で敢えて「第三の選択肢＝『学び』」を高く掲げたエコール KOBE を立ち上げることができたのは和歌山での「学びの作業所」の実践の成果があったからでしょう。いずれにせよ、何とか、2011年4月に一期生として15名もの学生を迎えて開校に漕ぎ着けることができました。

それ以来、11年間で150名を超える卒業生を世に送り出すまでになっていますが、これは、障害者の卒後の学びを求める声が多く大きいかを示す何よりの証左でしょうし、福祉型専攻科が全国各地に生まれてきていることもその声を裏付けるものです。

エコールKOBÉでは学園活動の基本をなす3本の柱＝「主体的に学ぶ」「豊かな体験」「仲間とともに」を中心に据えた多彩で創意工夫に満ちた教育活動を展開しております。研究ゼミや多種多様な選択講義、調理実習や野外活動、エコールコメディ、青春講座、アウトドアチャレンジなどがその一例です。

冒頭で近年、障害者の学びを取り巻く環境に「劇的変化」が生まれていると述べました。それは、障害者権利条約の批准に伴い、障害者の学びの環境に大きな変化が生まれたことを意味しています。文部科学省が設置した有識者会議の報告では明確に「障害の有無に関わらず誰もが学び続けることの社会を目指す」という方針が示されています。

これまでの取り組み自体は、エコールの実践も含め障害者の学びにとっては意義あるものとはいえ、まだまだ小さな一歩に過ぎません。これからが本物の学びを築くスタートラインであるのかも知れません。豊かな卒後の学びや生涯教育にいたる柔軟な発想による多様な実践など、更なる真摯な取り組みがこれからは求められているのではないのでしょうか。

（初出 教育月刊誌『クレスコ』1月号）

※「エコールKOBÉ」開設に当たっては「第三の選択肢を求めて～私たちの願い」と題するアピール文が力を発揮してくれました。次項にご紹介します。

「第三の選択肢を求めて～私たちの願い」

私たちの願い（原文）

私たちは今まで見過ごしてきていませんか。

ある重大な事実を。

私たちは今まで見落としてきていませんか。

私たちがごく当たり前に思っていることができない人たちがいるということ。

ある重大な事実とは何でしょう。

それは、障害を持っているという理由だけで当たり前のことが当たり前でないという事実です。その一つが教育を受ける権利です。とりわけ後期中等教育といわれる高等学校（特別支援学校においては高等部）の３年間で修了した後の教育を受ける権利です。通常、高校生なら、大学進学（※短期大学・専門学校を含む）や就職等、当たり前の様に与えられている選択肢が、障害を持つ高校生（特別支援学校高等部在籍）の圧倒的多数には実質的にほとんど保障されていないのです。これはとても奇妙なことではありませんか。憲法でも、教育基本法でも、「教育の機会均等」が謳われているのに。

私たちは希望します。

大学や短期大学が障害をもつ青年を受け入れる日がくることを。私たちは希望します。 公立の特別支援学校高等部に専攻科が設置され、希望する生徒が入学できる日がくることを。

私たちは始めたいと考えます。

こうした青年に第三の選択肢を提供するために、全国の先進的な事例に学びつつ、自立訓練（生活訓練）事業として「学びの作業所」を始めることで、第三の選択肢を提供する受け皿の一つになりたいと考えました。ここで高等部を卒業した青年が（過年度卒業生を含む）「①主体的に、②豊かに、③楽しく※」をモットーに、よりいっそう自立した社会人となっていくための二年間を過ごしてもらいたいと考えます。

私たちは手をつなぎたいと思います。

全国の高等部（高等学校）ですでに専攻科を設置している学校と手をつなぎたいと思います。和歌山をはじめ第三の選択肢としての受け皿となっている自立訓練（生活訓練）事業所と手をつなぎたいと思います。全国で高等部に専攻科設置を求めている多くの保護者や教育関係者と手をつなぎたいと思います。大学、短大への障害者の進学を支援するすべての団体や研究機関と手をつなぎたいと思います。そして、障害者福祉に携わっている行政はじめ福祉関係の人たちと手をつなぎたいと思います。

そして最後に、私たちには、大きな夢、大きな希望があることを表明したいと思います。

それは、やがて障害のあるなしに関係なく、高等学校を、高等部を卒業した後の選択肢が、多様に保障されることが当たり前になる日が来るという夢であり、希望です。このことを大きな夢、希望として抱きながら、多くの人たちと手を携えて、この事業を一步步確実に前へと進めていきたいと考えています。（当時の原文のまま）

このリーフレットで紹介している団体の活動場所



⑩但馬知的障がい者サッカー連盟



⑨東はりまチャングサークル

①神戸大学附属
特別支援学校

⑭アトリエ
KOKOROHA



④⑤しあわせの村
ユニバーサルカレッジ

⑪DANCE BOX

⑲エコール神戸



⑯よる・あーち



⑬おやこあんさんぶるピノキオ



②三田市社会福祉協議会作品

⑮にしはまピアノ教室

⑧特定非営利活動法人
にしのみや次世代育成支援協会



⑰特定非営利活動法人 TOPO

兵庫県

神戸市



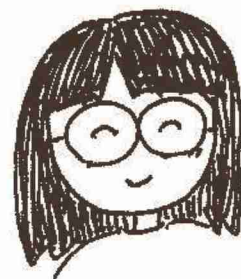
⑫ Bacchetta
majica らくが
きクラブ作品



⑥⑦神戸大学・学ぶ楽しみ発見
プログラム (KUPI)

活動、友だち拡大中 (ハルさん)

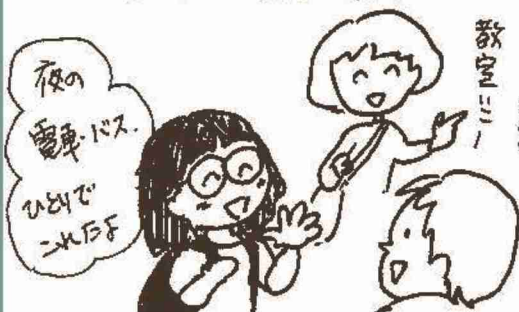
生まれつき障がいのある
ハルさん



よるあーち オンラインで



翌年は初参加



しあわせの村 ユニバーサルレクリエーションで



のる電車
まちがえたけど
来んだ！！

まふ ありてはてはてKOBE



表紙・裏表紙：イラスト

七尾優佳

あーち通信「えんじえる君Ⅱ」より

発行 2023 年 2 月

学校卒業後の障害者の学びを支援するための地域連携コンソーシアム構築事業
(兵庫県教育委員会・文部科学省受託)
神戸大学大学院人間発達環境学研究所

